

まわたりはにわせいさく いせき  
**馬渡埴輪製作遺跡**

—埴輪の工場跡—



◆ 遺跡の位置

馬渡埴輪製作遺跡は、ひたちなか市の中央部、JR常磐線勝田駅の東方約3.5kmの大字馬渡字向野の本郷川水系の小支流に面する低い台地に位置しています。遺跡は弥生団地の西側に隣接しており、勝田駅前から東方に延びる昭和通りから「本郷台団地入口」信号を北側に曲がると弥生団地に入り、次の信号を左折すると突きあたりが遺跡です。

◆ 遺跡の規模・性格

馬渡遺跡は、市内で唯一の古墳に立てる埴輪を生産していた遺跡（現代で言うと工場の跡）です。遺跡は、南から北へのびる細長い水田となっていた谷津を挟んで数地区に分かれて分布しています。南側からのびた谷津は東方に屈曲し、西側には浅い谷がのびており、この小谷津の北側をA地区、その反対側の南側をD地区と呼んでいます。さらに東方にのびた谷津の南側をB地区、その反対側をC地区と名付けました。

遺跡地は、地面を少し掘り下げると質の良い粘土がとれ、原料の粘土・水・燃料にする木や窯を造るのに適当な斜面など埴輪製作に必要な条件が整った場所であったと考えられます。

◆ 調査の成果

昭和38年に地元の中学生在がヤマユリの球根を掘っていて、馬形埴輪片を発見し、この遺跡発見のきっかけとなりました。昭和40(1965)年から昭和43(1968)年に7次にわたり発掘調査が実施されました。

さらに、遺跡の拡がり確認するため、昭和56(1981)年から昭和63(1988)年にかけて10次の発掘調査が実施されました。その後、平成になり数回の確認調査を実施しています。今までの発掘調査の結果、窯跡19基・住居跡2軒・工房跡12棟・粘土採掘坑25箇所以上と、これらを取り囲む溝跡が確認されました。

原料の粘土採掘から形をつくり、焼き上げるまでの埴輪製作の一連の工程がわかる遺構と工人たちの住居跡が、この遺跡で初めて発掘調査で確認されました。

◆ 埴輪窯の構造

埴輪を焼くための窯は、半地下式の登窯のぼりがまと呼ばれています(B地区の1基は、斜面をトンネル状にくりぬいた地下式)。登窯は、台地の傾斜地の斜面にそって溝状に掘りくぼめて、断面がU字形の窯底をつくり、この上に木などにより骨組みを作り、すき(わらや草など)を入れた粘土を貼り付けて天井部を作ったものです。窯の低い方に燃料を燃やすための焚口があり、高い方には煙出しがありました。焚口の下方には、かき出した灰や不良品を

捨てた灰原が続いています。窯跡は全長 7~8m, 中央部幅 1.5~2mで, 長楕円形を呈し, 窯尻と焚口部は幅が狭くなります。

窯跡は 4ヶ所に分かれて分布しており, A地区 9基, 反対側のD地区 5基, B地区 2基, 反対側のC地区 3基が確認されています。窯跡の天井部は, すでに崩落しており, 窯の壁や底は赤褐色に固く焼きしまっており, 焼成温度は 1000 度以上に達したと考えられています。

#### ◆ 埴輪づくりの遺構

埴輪づくりの工程は, 粘土を掘り出して砕き, 水や砂を加えながらこねて素地(粘土)<sup>そじ</sup>をつくり, 数カ月熟成させます。次に工房(作業場)で, 粘土を輪積みにして各種の埴輪を形づくりします。この生埴輪は干し場で 1 カ月ほど陰干しし, 窯場で焼きあげます。

粘土採掘坑は, 露天掘りにより, 赤土(関東ローム層)の下層の黄褐色や青白色の粘土を採掘したもので, 採掘後に埴輪片や土師器を廃棄したり, 埋め戻してその上に工房を設けた例もありました。

工房跡は長方形プランを呈し, 床には原料の粘土塊がみられ, 赤色顔料の一塊が検出された工房もあります。工人たちの住居跡は, ほぼ正方形の竪穴で, 北側にカマドを設けています。

#### ◆ 出土遺物

遺跡からは, 多くの円筒埴輪と朝花形円筒・人物(武装・平装)・器材・動物埴輪などが出土しました。等身大に近い人物埴輪は, 上半身と下半身を別々に製作して, ソケット式に組み合わせるもので, 合理的な埴輪製作技術の特徴を示す良好な資料です。

馬形埴輪は遺跡発見のきっかけになった資料で, 馬具を装着する飾馬を表現しており 轡<sup>くつわ</sup>・馬鈴<sup>ぎょうよう</sup>・鞍・杏葉などの馬具が表現されておりほぼ完存しています。馬形埴輪 1 点と人物埴輪 2 点が市指定有形文化財に指定されています。埴輪のほか, 工人たちの使用した土師器や鉄製品も出土しています。

#### ◆ 埴輪の生産と供給

馬渡遺跡は, 古墳時代の 5 世紀末から 6 世紀末までの約 100 年間にわたり操業していました。埴輪窯が同時に操業していたのは, 2~4 基位と想定されますが, 各地区の窯がどのような順序で埴輪づくりを行っていたかは明確ではありません。

この工場で常時煙を上げていたのではなく, 周辺で古墳が造られ, 大量の埴輪が必要となった時に, 数年間埴輪づくりが行われ, その後数十年中断してから次の埴輪づくりが再開されたと考えられます。

馬渡遺跡から出土した埴輪の供給先については, 市内の川子塚古墳(磯崎町)や鉾の宮古墳(高場)などのほか, 周辺市町村約 10 km位の範囲が想定されています。

#### ◆ はにわ公園

馬渡埴輪製作遺跡は, 昭和 44 年 8 月に国史跡指定を受け, その後発掘調査により広がり確認された南側の山林が, 昭和 60 年に追加指定を受けています。遺跡は「馬渡はにわ公園」として整備し, 遺構は埋め戻して, そのまま地下に保存し, 主な遺構はツツジの植込み等に表示しています。公園の広さは 2.1ha で, 水田であった湿地帯は花ショウブ園となっており, 初夏には多くの方が訪れ, 市民の憩いの場となっています。